



ノーベル賞記念賞とメダル



授賞式直後に東京理科大、大川教授と



ノーベル賞授賞式の様子



授賞式直後、付き添いの人と



晩さん会の様子



2014年度ノーベル物理学賞受賞者（前列左より天野 浩教授、赤崎 勇終身教授、中村修二教授）

の教授をしています。46歳で米国にきましたから、言葉が最大の問題でどうしようもありません。最初は英語をどうしようかと悩んでいましたが、今では日本語交じりの英語でやっています。それで理解できなければ、それでいいという開き直りでやっています。その分、研究で頑張ろうと決めています。研究ができれば、言葉のハンディを大目に見てくれるところが、米国らしいところです。

こちらでは、ドクターコースの学生を、10人ぐらい雇って研究をしています。雇うというのは、一人当たり600万円ぐらいの給料を払うからです。学生はそれから授業料、保険代、その他を支払って、手元に残るのは、100万円ぐらいです。それで生活しています。学生は、大体半分ぐらいが米国人で残り半分ぐらいが外国から来ています。私の所属する材料物性工学部は10年前ぐらいから、全米でのランク付けが一番です。このため世界中から優秀な学生が集まっています。ほとんどの学生は、研究の方向性を決めてやるだけで後はほったからして、自由に研究させています。またそれが、自分の経験からして一番だと思っています。ただ10人学生が居れば、必ず1〜2人は、卒業が危ぶまれる



母校 徳島大学栄誉賞授与式・寄附目録贈呈式にて香川征学長と

ような学生がいるので、そのような学生は、かなりつきっきりで見えています。教授の主な仕事は、研究資金集めです。学生、ポストドクへの給料の件費と研究費を合計すると、年間一億円ぐらい集める必要があります。

日本人の学生は、2006年ぐらいまで一人いたのですが、今は一人もいません。UCSB全体で見ても、日本人の学生はほとんど減っている感じがします。将来の日本の国際化を心配しています。海外に出る機会があれば、ぜひ、日本の学生には海外に出てほしいと願っています。それが日本の国際化に大きく貢献すると思っています。

中村修二先生 祝 ノーベル物理学賞受賞

徳島大学時代から、ノーベル賞受賞まで

1973年に徳島大学工学部電子工学科に入学しました。徳島大学に入学した理由は、理系の配点が高く、入学しやすいと言う理由だけでした。当時の得意な科目は理系だけで、文系の科目は全くだめでした。徳島大学での生活は、質素な生活に徹していました。お金を使わないに徹していました。親の仕送り無しでの生活を目標にしていました。理由は、大学に入学して二週間ぐらいして大学に行くかなくなったからです。親に迷惑を掛けただけだという自分なりの考えです。下宿代は月5千円でした。これを、家庭教師のバイトをしながら、後は3年生ぐらいになってからの奨学金で賄って生活していました。大学は半年ぐらいして行きだしたのですが、授業は、あまりおもしろくありませんでした。4年生からの卒業研究がおもしろくなって、大学院修士課程まで行きました。

1979年の卒業後は日亜化学に入社しました。日亜化学では、最初の10年間は、開発課で赤外や赤色発光ダイオードに使う材料、バルク結晶、エピタキシャル成長、デバイス等の研究をしましたが、それらの製品はあまり売れず会社には貢献できませんでした。その後、1989年から青色発光ダイオードの研究をし、1993年に開発、製品化に成功しました。1999年には日亜化学を辞めて、2000年からは米国のカリフォルニア大学で材料物性工学部